
あなたといるから

アサルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたといるから

【Zコード】

Z8553P

【作者名】

アサルト

【あらすじ】

死にたがりの女子高生・神宮寺カナコと、PDDの及川ミズキの出逢いの物語。

私は生まれる世界を間違えた。

あるいは、人として生まれた事がそもそもの間違いだった。

私はこの世界に適応出来ない。

表向きは平和で豊かで、しかし欺瞞に満ちたこの世界に嫌悪感を抱いている。

生きる事が面倒くさい。

辛いとさえ感じる。

変わらないうまく嫌気がれる。

くだらない生活に苛立ちを覚える。

理不眞面目不条理で不合理な世界に呪縛がかかる。

私はこの世界に生まれてへるべきでなかつた。

いつも思わずこなこられなー。

そう考へずにはいられない。

そう、私は

×
×
×

あなたといふから

「…………死にたい」

少女はそう呟いた。

つややかな長い髪は腰まで届くほど長い。肌の色はやや白く、瞳の色は黒い。整った顔立ちは可愛いといつよりは綺麗だと評されるだろ。

神宮寺カナコ。

十六歳の高校一年生。

だが、その雰囲気は^{けだる}氣怠く、世間一般に持たれる女子高生のイメージからは程遠い。

眠たそつに目を半眼にし、学校の屋上で手すりにもたれかかっている。

風景を眺めているわけではない。

彼女の目は遠くを ここではないどこかを見ようとしていた。

「また始まつたよ、カナコの『死にたい』が」

そう言つたのはカナコの隣に居た少女だ。

黒い髪は耳が隠れるくらいのショートカット。どこか余裕のある表情をしており、人懐っこい雰囲気がある。カナコと同じデザインの黒いセーラー服をラフに着崩しているが、だらしない感じはしない。

及川ミズキ。

カナコの同級生にして、唯一、彼女の友人と呼べる存在である。

「そんなに死にたきや、死ねばいいじゃない？ それとも私の気を
引きたくて言つてるのかな？」

明るい口調で言つミズキ。

「…………」

対するカナコは無言で遠くを見ているだけだ。

ミズキは嘆息して、友人の横顔を眺める。

カナコは美人だ。同性のミズキが憧れるくらいに整った顔つきを
している。これで愛想が良ければ間違いないくもてる が、彼女は
クラスで浮いていた。ミズキ以外ととともに会話をしている場面な
ど見た事が無い。

とにかく無愛想で取つ付きにくい、他人を寄せ付けない雰囲気が
ある。

そんなカナコだから、自然とクラスからは孤立していった。

学校が始まってひと月もすると授業にも出なくなつた。学校には
来ているのだが、たいていの時間は屋上で^{たそがれ}黄昏^{たそがれ}ている。

日がな一日、遠くを眺めてはため息を漏らしている。

その姿が美しかった。

だからミズキはカナコに興味がわいた。始めはただの好奇心だったのだが、気がつけば彼女と一緒に居るようになつた。

無論、ミズキは授業には出でてるので、カナコと過ごすのは毎休みや放課後だけだ。会話らしい会話は無い。ただミズキはカナコの隣に並ぶだけ。

そのわずかな時間に必ず一度はカナコが呟く　『死にたい』と。付き合い始めた頃はその理由を訊いたりもしたが、カナコは応えなかつた。

ミズキもそれ以上、言及しなかつた。

その一線を超えてしまつたら、カナコとの関係が終わつてしまつ様な気がしたから。

生きる事に意味が見出せなくなつたのはいつからだつただろうか。

気がつけばカナコの心は病んでいた。

「この世界の在り方に疑問を持つ様になった。

他者という存在に不信感を抱く様になった。

自分という存在に違和感を感じる様になった。

ひどい虚無感と虚脱感に苛まれる様になった。

憂鬱で無気力な少女になった。

だからあの日、カナコは屋上から飛び降りる積もりだった。

高校生になつても何も変わらなかつたから。

おそらくこの先ももつ何も変わらない。

退屈で変わらない日常の繰り返し。

そう思つと気が狂いそつだつた。

だから死のうと決めた。

しかし……。

「ねえ、何してるの?」

場違いに明るい声にカナコは振り向いた。そこにはカナコと同年代である少しが居た。

耳が隠れるくらいの黒髪のショートカット。美人とは言えないまでも、愛嬌のある可愛らしい顔つきをしている。

カナコはその少女に見覚えがあった。確かクラスメイトだったと思うが、名前は思い出せない。というか知らない。

「及川ミズキ ミズキでいいよ、神富寺カナコさん」

カナコの思考を読んだかの様に、及川ミズキは名乗った。

「もしかして、飛び降りるところだつた？」

ミズキにしてみれば「冗談だつたのだろうが、少しでも空気の読める人間であれば、そんな事は言えない雰囲気だ。そういう意味では、ミズキは空氣の読めない少女だった。

無視してもよかつた。普段であればそうしていた。

「……ええ。だつたら何？」

だが、カナコはミズキの問いかけに応えた。

理由は判らない。ただの氣まぐれだったのかも知れない。

対するミズキは、

「うん、別に？ ただ、ここから落ちたら痛そだなって」

と、やはり場違いな様子で言った。

「…………」

「この少女は馬鹿なのではないか？ カナコはそう思った。

「ここから落ちたら、痛いじゃ済まないわ」

「せうだよな。下手したら死んじゃうかも」

ミズキはカナコの隣に並ぶと、手すり越しに地上を見下ろした。

「もしかして、死のうとしてたの？」

今気がついたとばかりにミズキは訊いてきた。

やはりこの少女はどこかおかしいに違いない。この状況で他に何の目的があつて飛び降りなどするのか、考えるまでもない。

「あ、変なこと言つてたら「めんね。私、病氣があるらしいくて、時々、変なこと言つちやつらしこの」

ミズキの言葉にカナコは一瞬だが戸惑つた。

これは後になつて知つた事だが、ミズキは広汎性発達障害（PDD）と呼ばれる精神疾患を患つていた。

ミズキの妙な言動の原因に納得がいったと同時に、カナコは激しい怒りを覚えた。

どうして人間は平等ではないのだろう?

どうして力ナゴの様に厭世觀を持つ者や、ミズキの様に障害を持つ者が生まれるのだろう?

答えは判つてゐる　『生贊』だ。

知恵を得た人間は同時に『嫉妬』や『傲慢』といつ感情も知つてしまつた。

いわゆる『七つの大罪』である。

常に人間は自分より劣つてゐる者を見下して心の平穏を保つている。

無自覺にだ。

『生贊』になる者　犠牲無くして人間の社会は成立しない。

神は何故そんな風に人間をつくつた?

神などいなくともいい、何故そんな風に進化した?

カナゴの怒りはそういうものに向かつていた。

「どうしたの?　怖い顔してゐる

ミズキは平然と訊いてきた。

それがカナコの瘤かんに障さわつた。

「あなたは腹が立たないの！？ そんな風に生まれてきて」

そこまで言つて、自分がひどく残酷な事を言いふとしている事に気付いた。

これでは無神経に生きている他の人間と変わらない。

「え……何が？」

そんなカナコの心情には気付きもせず、ミズキはきょとんとしている。それがカナコは許せなかつた。

だから

「この世界の何もかもよ ッ！」

激昂げきこうした。

自分で自分が抑えられなかつた。

これではただのハツ当たりだ。

なのに

「『めんね。私のせいで怒つてるんだよね？』

と、ミズキは謝つた。

悲しそうな目をして、カナコを見上げた。

「『』めんなさい。だから、泣かないで」

「！？」

カナコは泣いていた。知らずに涙を流していた。
おかしい。何故、自分は泣いているのだろう?
判らない。

悲しくなどないはずなのに……。

そうしてカナコが立ちつくしていると、ミズキは何か思いついた
様に、カナコの両手を包み込むように握った。

優しく。慈しむ様に。

カナコは不思議な気分になつた。それ立っていた気持ちが穏
やかになる。

誰かと手をつないだのはどれくらいぶりだろう　そんな事を考
える。

「……あなたの手は温かいわね　ミズキ」

自然とミズキのことを名前で呼んだ。

「私、体温が高いんだ」

ミズキは誇らしげに言った。

「ねえ神宮寺さん、私もあなたのことカナコって呼んでいい？」

「……別に、好きにすればいいわ」

「うん。ありがとう カナコ」

何か恥かしくなつて、カナコはミズキから視線をそらした。

これがカナコとミズキの出逢いだった。

それから毎日、昼休みと放課後は屋上で一人一緒に過ごした。

他愛のない事を話した。

何も話さず、ただ一緒にいることもあつた。

会話が無くとも、それを気まずいとは感じなかつた。

いつしか、二人でいるこの空気が心地良くなつていた。

だがそれでも、カナコの厭世観からくる『死にたい』という衝動

は消えない。

だからカナ「は余話が無くなると「死にたい」と思いついた様に呟く。

ミズキももう慣れたもので「死ねば?」と軽く聞き流す。

「本氣にしてないでしょ?」

「え、本氣だよ?」

「……ミズキは、私が死んでもいいんだ?」

「よくはないけど……カナ「が死んだら、私も一緒に死んであげるよ」

「まるで殺し文句みたいね」

「ほれてくれてもいいよ?」

「馬鹿じゃないの?」

「うん。馬鹿みたいだね、私達」

そうして、どちらからともなく笑った。

何がおかしかったのかは判らない。

ただおかしかった。

だから笑つた 馬鹿みたいに。

「ねえ、カナコ」

ひとしきり笑うと、ミズキが意を決したように言った。

「もうすぐ夏休みじゃない？ その前に少しだけでも、教室に来てみない？」

「…………」

ミズキの言葉にカナコの表情が曇る。

「無理にとは言わないよ。駄目だと思つたら出ていけばいいし」

ミズキの表情はいつもと変わらない。空気が変わったことなど気付いてもない。

否、気付いていない振りをしているのではないか？ ミズキと付き合つようになつて、いつしかカナコはそう思つ様になつた。

他人の顔色をうかがつていなければ生きていけないこの世界で、それはとても危うい生き方だ。にも関わらず、ミズキはそれをしない。

あるいは出来ない。

カナコは急にミズキの事が心配になつた。ミズキは教室で上手くやつていけているのだろうか？

だから

「…………考えておく」

そう、ぽつりとカナコが呟いたのをミズキは聞き逃さなかつた。

「本当に？ 来てくれるの？」

まるで自分の事の様に喜ぶミズキ。何がそんなに嬉しいのだろうかとカナコは理解出来なかつた。

「だから、考えておくだけだつて」「

「待ってるからー、絶対だよー。」

カナコの言葉に被せる様にミズキはまくし立てた。

「じゃあ、明日ねー。」

そう言つてミズキはカナコの返事も聞かずに帰つた。

夕焼けが照らす氣怠い雰囲気にひとり残されたカナコは途方に暮れた。

翌日、カナコは教室に向かう決心をした。ミズキの言う様に、黙だと思ったら出でていけばいい。それくらいの気持ちだった。

校門を通り、靴を履き替え、1年生の校舎に向かつ。

『1 A』と掲げられた標識の教室にたどり着く。

すると、「おはようー」と声をかけられた。

ミズキだ。

「……もしかして、待つてたの？」

カナコの問いにミズキは満面の笑顔で応えた。

「待つてるって言つたじやない」

そう言われてしまつと一の句が継げない。

「それに席替えしたから、場所が判らないと思つて」

「…………」

ミズキの配慮が嬉しくて、しかし『ありがとつ』と言えるだけの素直さもなく、カナコはぶつきひとつに訊ねた。

「窓際の私の席の後ろだよ」

ミズキがカナコの手を引く。

そして

「 おはよー、ミズキ。」

と、大きな声で教室に入った。

「 ちょ 」

止める間もあればこそ ミズキの声は教室中に響いていた。

教室に居た生徒達の視線がミズキに集まる。

「 おはよー、ミズキ」

「 及川さん、 声でかいよ」

「 なんで朝からそんなに元気なんだ? 」

そんな暖かい声がミズキを迎えていた。

「」

ひょっとしたらミズキも自分と同じようにクラスで浮いているのではないか? そう思つてカナコは教室に来る気になつたのだが
杞憂だつたようだ。

それならそれでいい。ミズキが嫌な目にあつていなければそれで良かつた。

だから自分がどんな態度で迎えられるかはどうでもよかつた。

やがて生徒達の視線がカナコに向いた。

教室がざわめく。三ヶ月近く教室に来ていなかつたクラスメイトが急に現れれば驚きもするだろう。

当然の反応だ。

予想は出来ていた。だからカナコは氣にした風もなく、平静を装つた。

さすがにミズキもこの場でカナコをクラスメイト達に紹介したりはせず、すぐに自分の席に座つた。

カナコもその後ろの席に座る。

落ち着かない。ここは自分の居場所ではない。

そんな気持ちが湧き出でくる。

教室に居る生徒全員がカナコを見ている様な気がする。

その視線に悪意がある様な気がする。

そんな被害妄想にも似たネガティブな感情に流されそうになる。

だが、そんなカナコを気遣つて　いや、そんな気遣いが出来る少女ではない　ミズキが振り返つて話しかけてくる。

普段通りに。

変わることなく。

「でも、いい様な話を楽しそう。」

そんなミズキを見ていると心が落ち着いた。

だからカナコは、今田一田ぐらいなら彼女に付き合つてやるもの
悪くない そう思った。

放課後。

カナコとミズキはいつも通りに屋上に居た。

「今日はどうだった？」

ミズキが問うてくる。

「……別に、どうしたことないわ」

カナコが淡々と応える。

事実だ。何も問題は起きたかったし、起こすことも無かった。

ただ、その日ハズキは終始楽しそうだった。

だから

「じゃあ、明日も来てくれる？」

といつハズキの言葉に、

「……考えておく」

とカナコは応えた。

「うん。待ってるからね」

「考えておくだけよ」

ハズキの言葉に、カナコはやはり不機嫌そうな口調で応えた。

厭世観はそういう簡単には無くならない。

理不尽で不条理で不合理な世界が好きにはなれない。

それでも

「ねえカナコ 私、あなたのことが好きだよ」

「………… 鷺じゃないの？」

それでも、一人でなら。

きっと世界は違つて見える。

変わらないものなど無いのだから。

FHN

(後書き)

理想の『友情もの』のひとつでこんな感じです。どうも、アサルトです。

故あって書いたものなのですが、せっかくだからと発表してみました。

どうでしょ？

どうとされても困るでしょうが、まあ、魔が差したと思つてください。

そして、よろしければ感想をください。

苦言でも結構ですので。

それでは読んでくださった貴方に感謝を。

シンデレラっぽい死にたがりの女の子は好きですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8553p/>

あなたといふから

2011年1月8日22時44分発行